



## アメリカ入国管理 —「別室エスコート」の後に起こること—

すずき かずこ  
鈴木 和子

●テキサスA & M大学・社会学部・准教授

あるアメリカ人の先生に、研究者になって得したと思うことはあるか、と尋ねたことがある。すかさず「いろんな国に旅行できること」との返事がかえってきた。学会や招待講演などで、自分ではなかなか選択しにくい国にも、研究活動の一環として旅行できるからということらしい。一理あるなどと思う。私費だったら躊躇ってしまう旅費等をカバーしてもらえらるのならば、出不精の私でさえ、行ってみようという気にさえなってくる場合もある。ただし、海外旅行は楽しいばかりでは終わらない。私の場合、その最たる例が、アメリカ帰国時の入国管理審査である。

現在私は、日本国籍のアメリカ永住者である。にもかかわらず、特に9/11以降、度々入管で引っかかり、別室連行という経緯をたどる。原因のひとつは、長時間フライトで肌が荒れ、指紋が採取しにくいからだと思う（「思う」というのは、絶対に理由を教えてくれないからだ）。ブースに入って指紋を採るときは、いつも緊張する。係員が大声で「エスコート！」と別室連行オフィサーを呼んだら最後、いつ解放されるかわからないからだ。連れや家族と引き離され、何時間も延々と待たされるのである。もちろん連れにも何の説明もない。ただ、「待っている」といわれるだけである。

私はといえば、長旅でくたびれた身で、別室でじっと椅子に座って待っているしかない。カメラ・携帯・コンピュータ等の使用は厳禁で、連れ

とは一切連絡がつかない。肉体的にも精神的にもかなりキツイ。知り合いの日本人研究者に聞いても、似たような経験をしている人はあまりいないので、自分は運が悪いのかもしれない。実際、別室連行のときは、たいていアジア系は自分ひとりという場合が多く、別室に控えている大半は中南米出身者で占められている。そんなわけで、ここでは、「別室エスコート」後に、何が起こっているのか、自分の経験を皆様と共有したい。

自分の経験では、「別室」の雰囲気はどこも似たようなものである。大人も子供もなるべく声を出さず、息を殺すようにしてじっと動かない。呼ばれていないのに立ったりすると、即注意される。まるで囚人になったような気がする。トイレもできるだけ我慢する。というのも、実際どこに連れて行かれるのかわからないからだ。某空港別室では、時々トイレ希望者を募っていた。希望者は一列に並ばされ、いくつかのグループに選別されて、さらにどこかに連れて行かれる。選別が男女別ではないので、雰囲氣的にナチスの強制連行みたいで、列車を降りた人々をどこに收容するのか選別しているような感じが、とにかく息苦しい。戻ってこない人がいるのも、待っている人たちの不安を更に煽ることになり、皆なるべくトイレを我慢している。オフィサー達は、たいてい威圧的で、ちゃんと仕事をしている人もいるのだろうが、あからさまないじめや嫌がらせも少なくない。無知な外国人に嘘の法律や脅しをかけているのを見て

いると、移民研究者として、「それは嘘だよ」と教えてあげたくなる。しかし、大学からは、入管には絶対逆らうなど忠告を受けているので、悪態は心の中にとどめておくしかない。

初めての「別室エスコート」体験は、今でも忘れられない。カリフォルニア大学サンディエゴ校に勤めていたときに、日本から妹が訪ねてきた。折角だからということで、婚約者（現在の夫）と共に、日帰りコースの定番であるお隣のティファナ（メキシコ）まで足を伸ばすことにした。書類に不備がないように大学に確認してから出かけたのだが、帰りの入国審査で自分だけ引っかかってしまった。うろたえた私たちに、係員は、「こういうことはよくあることなので心配はいらない。すぐ帰ってこれるから、他の2人は国境を出たところにマクドナルドがあるので、そこで帰りを待ってなさい」と言った。何が理由でとか、何でマックなのか疑問は色々あったのだが、すぐ済むという言葉に、私は妹たちに検査済みの荷物を預けて、別室に連れて行かれた。

別室では、人は沢山いるのに係員の横柄な口調ばかりが響き、なんだか急に不安になってきた。3～4時間待っても自分の番は来ないし、係員に聞いても「座って待っていなさい」以外の説明はない。いつ自分が呼ばれるのかは、別室に入ってきた順番どおりではない。何時間も待っているうちに、ある韓国人ビジネスマン（1人だけスーツだから目立っていた）が、何度も部屋と外を行き来しているのに気がついた。夕方になって人が少なくなってきたので、席を移動し、オフィサーたちと彼のやり取りに聞き耳をたてた。どうやら、彼は、近くに自分の勤め先か取引先かがあって、国境を越えるための書類の「不備」を修正するために、何度も往復させられているらしい。大柄な5～6人の制服オフィサーたちに立ち囲まれ、そのうえ責められていた。とうとう彼の目に涙が滲んで、結局、彼は国境をアメリカ側に越えられなかった。もしかして自分もああやって責め立てられるのかとビクビクしていると、研究関係で読んだ報告書の嫌なケースが頭に浮かんで、考えがどンドン負の方向に暴走していった。

そして、自分の名前が呼ばれると、（やっぱり）他のメキシコ人の1対1コースとは別に、先

ほど韓国人ビジネスマンをさいなんでいたオフィサーたちに囲まれてしまったのだ。曰く、書類に「不備」があるとか、翌日メキシコの日本大使館で書類を取り直せとか、ティファナで無事夜を過ごせるといいなとか。書類のどこがどう「不備」なのか説明もなく、これでは単なるいじめとしか思えない。嫌がらせで6時間も待っていたのかと思うと、無性に悔しくなった。何よりまだあちら側で待っている2人が心配で仕方なかった。そこで強気に、「納得したわけではないが、そちらの言うとおりにします。ティファナで野宿して、明日大使館で書類の申請をします。その代わり、そちらも、言ったことは守ってください。『すぐ』という言葉信じて親族が向こう側で待っているの、あなた方の誰かが、マックまで行って、私は無事だが帰れないことを伝えてください。そうでないと、私を心配して、警察や大使館に連絡するかもしれない。」すると、「携帯電話をかける」という。「携帯電話は持っていない。マックにいるという変な指示でも、入管の指示に忠実に従っています。指示をしたのはそちらなので指示の取り消しもそちらでお願いします」と、理屈というか屁理屈をできるだけ堂々とこねてみた。英語の話せない妹を、日本語の話せない婚約者と2人でマックに一昼夜おいておくわけにはいかない。私も必死だった。彼らは少し考えてから、あるオフィサーが別室の上司らしき人に話にいった。たちまち、他のオフィサーもその場を立ち去ってしまった。別室は、終業時間なのか人はほとんどいない。私はぼつねんとそこで立っていたのだが、戻ってきたオフィサーが突然帰っていいという。思わず「えっ？」と聞き返してしまった。一体、今までのやり取りは何だったのだろうか。呆気にとられていると、「この建物を出てすぐのトンネルをずっと歩いていったら国境があるから、勝手にゲート開けて出て行って」との指示。真っ暗なトンネルを歩いて出ると、妹と婚約者が涙を流しながら待っていた。「国境のゲートが閉鎖されて誰もいなくなっちゃったから、もう帰ってこないと思った。7時間もどこにいたんだ」と。

その後、似たようなことが未だに続いている。実は、この原稿も、ヒューストン空港の別室から解放された後に書いている。